

# 漢語サ変動詞「着 N する」の意味と構文

張 善実

DOI: 10.18999/stul.30.59

## 1. はじめに

本研究では、語構成論の観点から「着陸する」や「着手する」のような「着 N する」の意味的・構文的特徴について考察し、「着 N する」には着雪類、着弾類、着陸型、着任型、着色類、着手類、着帽類、着火類の 8 つに分類できることを述べる。

小林(2001、2004)、中川(2005)は、「着(V)陸(N)する」や「着(V)手(N)する」のような漢語サ変動詞(以下、V-N 型漢語動詞)が語外部にさらに項(N'P)を取る場合、その N'P は語内部の語構成と関わると述べている。しかし、これらの研究では語内部の名詞的要素 N に重点が置かれており、動詞的要素 V にはほとんど言及されていない。そのため、どのような動詞がどのような N'P を取り得るかまで掘り下げて考察するには至っていない。

そのため、本研究では V-N 型漢語動詞のうち「着 N する」を分析対象にして、(i)「着 N する」の内部構成と、(ii)「着 N する」の外部構成、(iii)N'P と N の意味関係の 3 つの側面から、「着 N する」が N'P を取るか否か、N'P を取る場合、どのような動詞がどのような N'P を取るかについて分析する。

このうち、(i)「着 N する」の内部構成とは、「着 N する」の「着」と N がいかなる格関係で結合しているかについて言うものである。「着 N する」の「着」には「着く」という自動詞の意味で使われるもの、「着ける」という他動詞の意味で使われるもの、「着る」という他動詞の意味で使われるものの三通りがある。このうち、「着く」という自動詞の意味で使われるものには N が〈移動物〉を表す場合と〈帰着点〉を表す場合の二通りがある。これに対し、「着ける」や「着る」という他動詞の意味で使われるものには N が〈移動物〉を表す場合しかなく、〈帰着点〉を表す場合はない。したが

って、「着 N する」の内部構成は表 1 に示すように大きく I 類～IV 類の 4 つのパターンに分けられる。

表 1 「着 N する」の内部構成要素の結合パターン

「着」の意味	N〈移動物〉	N〈帰着点〉
着く(自)	I 類:[N が着く](「着雪する」) [N が着く](「着信する」)	II 類:[N に着く](「着陸する」) [N に着く](「着任する」)
着ける(他)	III 類:[N を着ける](「着色する」) [N を着ける](「着手する」)	×
着る(他)	IV 類:[N を着る <sup>1)</sup> ](「着帽する」)	×

一方、(ii)「着 N する」の外部構成とは、「着 N する」が文の形成においていかなる格を取るかについて言うものである。「着 N する」には(1)～(3)のような自動詞用法のもの、(4)のような他動詞用法のもの、(5)のような自他両用法のものがある。

(1) a. 電線に湿った雪が着雪する。(自)

b. 電線が着雪する。(自)

(2) 旅客機が成田空港に着陸する。(自)

(3) 政府が予算編成に着手する。(自)

(4) 職人が製品を茶色に着色する。(他)

(5) a. ストーブが着火する。(自)

b. 花子がストーブを着火する。(他)

これらの動詞の(i)内部構成と(ii)外部構成における自他性に注目すると、(6)～(9)のように「着 N する」の「着」の自他と「着 N する」の自他が一致するものが多い。

(6) a. 電線に湿った雪が着雪する。(自)…[雪がつく](自)

b. 電線が着雪する。(自)…[雪がつく](自)

(7) 旅客機が成田空港に着陸する。(自)…[席に着く](自)

(8) a. 職人が製品を茶色に着色する。(他)…[色を着ける](他)

<sup>1</sup>「着る」は、現代日本語では主として体全体または上半身に着用することを表すが、本来は、衣服などを身につけるという意味で、着物以外に袴・笠・烏帽子・兜・布団・刀などについても用いられた(『大辞泉増補・新装版(デジタル版)』)。現代でも「着帽する」が使われているが、「着る」の本来の意味が残されていると言えるだろう。

b. 職人が製品に茶色を着色する。(他)…[色を着ける](他)

(9) a. ストープが着火する。(自)…[火がつく](自)

b. 花子がストーブを着火する。(他)…[火をつける](他)

しかし、「着 N する」には「着手する」のように内部構成と外部構成における動詞の自他が一致しないものもある。「着手する」は(10)のように内部構成においては「手を着ける」という他動詞の意味関係で結合されているが、外部構成においてはヲ格目的語を取らない自動詞用法として用いられる。

(10) 政府が予算編成に(\*両手を)着手する。(自)…[手を着ける](他)

また、「着 N する」は、外部構成において N'P を取る場合、その N'P と N の意味関係には以下のような 2 つのタイプが見られる。一つは、(6'a)、(7')、(8'a) のような「下位語－上位語」の関係で、もう一つは、(6'b)、(8'a)、(9') のような「所属先－所属物」の関係である。((iii) N'P と N の意味関係)

(6') a. 電線に 湿った雪が 着雪する。  
(下位語) (上位語)

b. 電線が 着雪する。  
(所属先) (所属物)

(7') 旅客機が 成田空港に 着陸する。  
(下位語) (上位語)

(8') a. 職人が 製品に 茶色を 着色する。  
(下位語) (上位語)

b. 職人が 製品を 茶色に 着色する。  
(所属先) (所属物)

(9') a. ストーブが 着火する。  
(所属先) (所属物)

b. 花子が ストーブを 着火する。  
(所属先) (所属物)

このように、「着 N する」は、(i) 内部構成、(ii) 外部構成、(iii) N'P と N の意味関係が複雑であるが、従来の研究ではほとんど論じられていない。したがって、本研究では V-N 型漢語動詞の意味的・構文的特徴に関する研究の一環として「着 N する」を取り上げ、その内部構成、外部構成、および N'P と N の意味関係の 3 つの側面から分析する。

## 2. 本動詞の意味

「着 N する」の意味的・構文的特徴について考察する前に本動詞の意味について概観する。「着 N する」は以下の 3 つの本動詞に対応する。

(A) 着く(自)

例: 着信する(電信が着く)、着陸する(陸上に着く)、着任する(任務に着く)

(B) 着ける(他)

例: 着色する(色を着ける)、着手する(手を着ける)、着目する(目を着ける)

(C) 着る(他)

例: 着装する(服装を着る)、着服する(服を着る)

このうち、(A)「着く」は自動詞用法として用いられ、(B)「着ける」と(C)「着る」は他動詞用法として用いられる。また、「着 N する」の中には、「着火する」のように「着く」(火が着く)と「着ける」(火を着ける)の二通りの本動詞に対応するものがある。

以下、「着く」、「着ける」、「着る」のそれぞれの意味<sup>2</sup>について述べ、その中のどの意味と「着 N する」が対応するかについて見る。

まず、自動詞「着く」の意味について見る。「着く」は大きく以下の①～⑤の 5 つの意味を表し、いずれも「着 N する」と対応する。

(A) 本動詞「着(付／就／点)く」の意味:

- ① あるものが表面に密着する。付着する<sup>3</sup>。

「雪が木の枝につく」「テーブルにほこりがつく」

- ② ある場所から移動して他の場所に到達する。

「選手たちが競技場に着く」「貨物船が港に着く」

- ③ ある場所に位置する<sup>4</sup>。

「家族全員が食卓につく」「席につく」「座につく」

- ④ 体の一部分がある場所に触れる。

「足がプールの底に着く」「新製品に目着く」

<sup>2</sup> 「着く」、「着ける」、「着る」の意味は『大辞泉増補・新装版(デジタル版)』(松村明監修(2006))と『明鏡国語辞典』(北原保雄編(2010))に基づいている。

<sup>3</sup> 意味①は通常「付く」と表記される。

<sup>4</sup> 意味②は「就く」とも表記される。ただし、V-N 型漢語動詞の場合は「着席する」や「着座する」はあるのに対し、「就席する」や「就座する」はない。

- ⑤ 燃えはじめる。また、スイッチなどが入って器具が作動する<sup>5</sup>。

「火がつく」「電気がつく」「テレビがつく」「クーラーがつく」

次に、他動詞「着ける」の意味について見る。「着ける」は大きく以下の①～⑥の6つの意味を表し、このうち、「着 N する」と対応するのは意味①、②、④、⑤である。

(B) 本動詞「着(付／就／点)ける」の意味：

- ① あるものを表面に密着させる。付着させる<sup>6</sup>。

「服にボタンをつける」「口紅をつける」「傷口に薬をつける」

- ② 乗り物のある場所に寄せ止める。

「運転手が車を駅の正面に着ける」「船頭が船を岸に着ける」

- ③ 人のある場所に位置させる<sup>7</sup>。

「先生が生徒たちを席に着ける」

- ④ 体のある部分のある場所に触れさせる。

「立った状態で手を床に着ける」「新製品に目を着ける」

- ⑤ 衣服や装身具などを体の一部に装う。

「選手がユニフォームを身に着ける」「犬に首輪をつける」

- ⑥ 燃えるようにする。またはスイッチなどを入れて器具を作動させる。

「枯れ草に火をつける」「電気をつける」「テレビをつける」

最後に、他動詞「着る」の意味について見る。「着る」は次のような意味を表し、「着帽する」や「着衣する」のような動詞と対応する。

(C) 本動詞「着る」の意味：

- ① 全身や上半身を覆うような衣服を身に着ける。

「弘は赤いシャツを着ている」「近頃服を着たペットが目立つ」

この「着る」と「身に着ける」(「着ける」の意味⑤)は似て非なるところがある。(11)のようにヲ格目的語がシャツやワンピースのように全身や上半身を覆うような衣服の場合は置き換えられるが、(12)のようにヲ格目的語がズボンやスカートのように下半身に着ける場合や、靴やサンダルのように足に履く場合、帽子や手袋、首飾りの

<sup>5</sup> 意味⑤は「点く」とも表記される。

<sup>6</sup> 意味①は通常「付ける」と表記される。

<sup>7</sup> 意味③は「就ける」とも表記される。

ように装身具を身に装う場合は「身に着ける」は用いられるが、「着る」は用いられない。ここから「着ける」の意味⑤は「着る」より使用範囲が広いことが分かる。

(11) 洋子は赤い{ワンピース／着物}を{着ている／身に着けている}

(12) 洋子は赤い{ズボン／手袋}を{\*着ている／身に着けている}

以上、「着 N する」の本動詞「着く」、「着ける」、「着る」の意味について概観した。このうち、「着 N する」と対応する意味のみを示すと表 2 のようになる。

表 2 本動詞と「着 N する」の対応関係

本 動 詞		「着 N する」
着く (自)	①あるものが表面に密着する。付着する。 例:「木の枝に雪がつく」「船に氷がつく」	着雪する、着氷する
	②ある場所から移動して他の場所に到達する。 例:「飛行機が陸上に着く」「船が岸に着く」	着陸する、着岸する、 着地する、着水する
	③ある場所に位置する。 例:「席につく」「座につく」「ポジションにつく」	着席する、着座する、 着任する
	④体の一部分がある場所に触れる。 例:「新製品に目着く」	着目する
	⑤燃えはじめる。またはスイッチなどが入って器具が作動する。例:「火がつく」「電気をつける」	着火する
着ける (他)	①あるものを表面に密着させる。付着させる。 例:「布に色をつける」	着色する
	②乗り物がある場所に寄せ止める。 例:「船頭が船を岸に着ける」	着岸する
	④体の一部分がある場所に触れさせる。 例:「手を天井に着ける」「新製品に目を着ける」	着手する、着目する、 着眼する
	⑤衣服や装身具などを体の一部分に装う。 例:「赤いシャツを身に着ける」	着帽する、着衣する <sup>8</sup>
着る (他)	①全身や上半身を覆うような衣服を身に着ける。 例:「赤いシャツを着る」	

表 2 に示されるように「着 N する」の意味は本動詞「着く」、「着る」の意味と対応し、「着ける」の意味よりは限定されている。すなわち、本動詞「着く」は大きく①～⑤の 5 つの意味を表し、本動詞「着る」は①の意味を表し、どれも対応する「着 N する」を持つ。これに対し、本動詞「着ける」は基本的に①～⑥の意味を表すのに対し、

<sup>8</sup> 「(会社の金を)着服する」の「服」は名詞的要素ではなく、「身につける」の意味の動詞的要素である(『新明解国語辞典第七版』より)。

「着 N する」はこのうちの意味①、②、④、⑤に対応する。例えば、「着目する」は「着ける」の意味④とは対応する（「目を着ける」）が、「着く」の意味④とは対応しない（「\*目が着く」）。

### 3 「着 N する」の特徴

本節では、「着 N する」の意味的・構文的特徴について考察する。表 1 に示したように、「着 N する」は（i）内部構成要素の結合パターンによって大きく I 類～IV 類の 4 つに分けられる。また、（ii）外部構成によってさらに着雪類、着弾類、着陸型、着任型、着色類、着手類、着帽類、着火類の 8 つに分けられる。以下、それぞれのタイプの特徴について詳しく論じる。

#### 3.1 I 類:[N が着く]

このタイプは、内部構成において[N<移動物>が着く]という無意志自動詞の意味関係で結合されており、外部構成においても無意志自動詞用法として用いられる。このタイプには自然現象を表す 1)「着雪類」と、背後に人為性を含意した 2)「着弾類」に分けられる。

##### 1) 「着雪類」

「着雪類」には「着雪する」と「着氷する」などが挙げられる。

（i）内部構成について見ると、「着雪類」の内部構成は[N が着く]という意味関係になっており、N は<移動物>を表す。例えば、「着雪する」はある場所に[雪が着く]ことを表し、「着氷する」はある場所に[氷が着く]ことを表す。

（ii）外部構成について見ると、「着雪類」の外部構成は(13a、b)、(14a、b)のようにガ格の N'P を取って無意志自動詞の用法として用いられる。ガ格の N'P には、(13a)の「湿った雪」や(14a)の「樹氷」のように<移動物>が来る場合と、(13b)の「松」や(14b)の「船体」のように<帰着点>が来る場合との二通りがある。

- (13) a. 湿った雪は電線にも着雪しやすく、電線上にうず高く積もったり、電線をすっぽり包んだりします。(http://www.tdk.co.jp/techmag/ninja/ daa00911.htm)

- b. 天橋立にはよく来ているが、松が着雪して白くなっているのは今だに見たことがない。(http://blogs.yahoo.co.jp/coolheartgallery/20393826.html)
- (14) a. 冬には枝葉に樹氷が着氷して幻想的な景色を見せてくれます。  
(http://www.hankyu.co.jp/ekiblo/macaron/14066/)
- b. 冬期の道東海域は、天候が急変し海は大時化となることが多く、また厳寒により船体が着氷しやすくなります。(http://www.kaiho.mlit.go.jp/01kanku/kushiro/04\_news/06\_news\_12.htm)

このように、自然現象を表す「着雪類」においても、外部構成において二通りの N'P を取る。

## 2) 「着弾類」

「着弾類」には「着弾する」、「着信する」、「着金する」などが挙げられる。

(i) 内部構成について見ると、2)「着弾類」も 1)「着雪類」と同じく[N が着く]という自動詞の意味関係で結合されており、N は〈移動物〉を表す。すなわち、「着弾する」は[弾が着く]ことを表し、「着信する」は[電信が着く]ことを表し、「着金する」は[送金が着く]ことを表す。

(ii) 外部構成について見ると、2)「着弾類」は外部構成において 1)「着雪類」と同じくガ格の N'P を取って無意志自動詞用法として用いられる。この時、N'P は(15)の「流れ弾」や(16)の「メール」、(17)の「保険金」のようにある場所に移動する〈移動物〉であり、いずれも N の下位語に当たる成分である。

(15) 日本大使館から入った連絡では、攻撃による流れ弾が大使館に着弾し、建物の一部が破損したという。(東京朝刊 2012 年 04 月 16 日)

(16) 加藤教授は、最近の学生は授業中、堂々と机の上に携帯を置くという。電話で話す学生はいないが、メールが着信すると即座に返信する。(東京朝刊 2007 年 01 月 08 日)

(17) 保険会社の提示した金額でよければ、その 1 週間以内に保険金請求書にて指定した口座に保険金が着金します。(http://nanapi.jp/63159/)

ここまで、2)「着信類」は 1)「着雪類」と同じく、内部構成において「N〈移動物〉が着く」という意味関係になっており、外部構成においても無意志自動詞の用法を持つことを見た。しかし、両者は動作主の有無という面で違いが見られる。すなわち、



前者は「流れ弾が着弾する」「メールが着信する」という事態が成り立つ前提として、その事態を引き起こす動作主が不可欠であるのに対し、後者は「電線に湿った雪が着雪する」のように誰かによって引き起こされたのではなく、気候の変化による自然現象である点で異なる。

また、「着雪類」は「電線が着雪する」のように外部構成において、N'P に〈移動物〉と N の〈帰着点〉をガ格主語として取り得るのに対し、「着信類」は(18a)～(20a)のようにガ格の N'P に〈移動物〉を取ることはできても、(18b)～(20b)のように N'P 〈帰着点〉を取ることはできないという点でも違いが見られる。

(18) a. 流れ弾が 大使館に 着弾した。  
          〈移動物〉    〈帰着点〉 〈移動物〉

          b. \*大使館が 着弾した。  
              〈帰着点〉    〈移動物〉

(19) a. 緊急メールが 事務所に 着信した。  
          〈移動物〉    〈帰着点〉 〈移動物〉

          b. \*事務所が 着信した。  
              〈帰着点〉    〈移動物〉

(20) a. 保険金が 指定口座に 着金した。  
          〈移動物〉    〈帰着点〉    〈移動物〉

          b. \*指定口座が 着金した。  
              〈帰着点〉    〈移動物〉

### 3.2 II 類:[N に着く]

このタイプは、内部構成において[N〈帰着点〉に着く]という自動詞の意味関係で結合しており、外部構成においても自動詞用法として用いられる。このタイプには N が物理的な場所を表す 3)「着陸類」と N が抽象的な場所(組織)を表す 4)「着任類」に分けられる。

#### 3)「着陸類」

まず、「着陸類」について見る。このタイプには「着陸する」、「着岸する」、「着水する」、「着席する」、「着座する」などの動詞が挙げられる。

(i) 内部構成について見ると、「着陸類」は[N に着く]という自動詞の意味関係になっており、N は〈帰着点〉を表す。例えば、「着陸する」は飛行機などが陸に着くことを表し、「着岸する」は船などが[岸に着く]ことを表す。また、「着席する」は人が[席に着く]ことを表し、「着座する」は人が[座席に着く]ことを表す。

(ii) 外部構成について見ると、「着陸類」は(21)のように二格の N'P を取って自動詞用法として用いられる。この場合、N'P には(21a)の「成田空港の滑走路」や(21b)の「成田空港」、(21c)の「成田」のように空間的に隣接する表現が来る。

- (21) a. 旅客機は成田空港の滑走路に着陸した。  
b. 旅客機は成田空港に着陸した。  
c. 旅客機は成田に着陸した。

例(21)において、「旅客機」と「滑走路」、「成田空港」、「成田」の関係を図に示すと以下ようになる。空中に対して、「滑走路」は飛行中の旅客機が降りる際に到着する陸であり、「成田空港」、「成田」は間接的な陸である。そのため、「滑走路」、「成田空港」、「成田」はいずれも主語の「旅客機」にとって〈帰着点〉という解釈となり、N(「陸」)とは「下位語－上位語」の関係にあると考えられる。

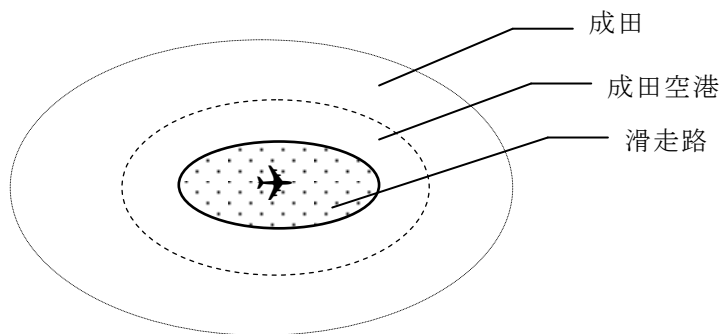


図 1 「N'P に着陸する」の概念図

同様に、「着岸する」、「着席する」、「着座する」などの動詞も外部構成において「着陸する」と同じ特徴を有する。(22)～(23)の N'P はいずれも主体が到達する〈帰着点〉を表し、N の下位語となる。

- (22) a. 貨物船は神戸港 N 岸壁に着岸した。  
b. 貨物船は神戸港に着岸した。  
c. 貨物船は神戸に着岸した。

- (23) a. 太郎が赤いすに着席する。  
b. 太郎がテーブルの前に着席する<sup>9</sup>。  
c. 太郎が会場に着席する。
- (24) a. 棋士が上座に着座する。  
b. 棋士が囲碁の前に着座する。  
c. 棋士が対局室に着座する。

#### 4) 「着任類」

次に、「着任類」について見る。このタイプには「着任する」、「着工する」などの動詞が挙げられる。

(i) 「着任類」の内部構成を見ると、3) 「着陸類」と同じく[N に着く]という自動詞の意味関係になっており、N は〈帰着点〉を表す。ただし、「着陸類」の場合は N が物理的な場所を表しているのに対し、「着任類」の N は抽象的な事柄を表す点で異なる。例えば、「着任する」はある[任務地や任務(ポスト)に着く]ことを表し、「着工する」はある[工事に着く]ことを表す。

(ii) 「着任類」の外部構成を見ると、(25)の「新しい学校に着任する」、(26)の「刑事課長に着任する」のように N'P に二格を取って自動詞用法として用いられる。この時、「着任する」の N'P には(25)の「新しい学校」のように主体が着く組織(任務地)を表す二格が来る場合と、(26)の「刑事課長」のように主体が着く職務(任務)を表す二格が来る場合の二通りがある。また、N'P が「新しい学校」のように組織を表す場合、「着任する」の「任」は「任務地」と「任務」の二通りの解釈ができる。N が「任務地」を表す場合は、N'P「新しい学校」は「任務地」の下位語と考えられるため、N'P「新しい学校」とN「任」は「下位語－上位語」の関係にあると考えられる。一方、N が「任務」を表す場合は、N'P「新しい学校」は「任務」の所有者であると考えられるため、N'P「新しい学校」と N「任」は「所有者－所有物」の関係にあると考

<sup>9</sup> 日本語には「テーブルに着席する」という表現もある。山梨(1993:93)は「机に座って手紙を書く」と「机(の前)に座って手紙を書く」を挙げ、両者は「空間／場所の隣接性に基づく表現」であるとし、トポニミー(toponymy)というメトニミーの下位類で説明している。ただし、山梨でも指摘しているように前者の「机」を「机の前」というのはあくまでも慣用的な解釈であり、「机の上」や「机の横」の解釈も不可能ではない。一方、「テーブルに着席する」の場合、「席」が明示されることにより、テーブルの上や横に座るという解釈は排除され、「テーブルの前の席」という意味に限定される(中川 2005:94 を参照)。

えられる。

(25) 被災した児童や生徒の学校生活を支援しようと、東京都が宮城県の小中高などの学校に派遣を決めた六十八人の教員の大半が九日、新しい学校に着任した。(東京夕刊 2011 年 05 月 09 日)

(26) 同表彰は県警で四十六人目。受賞後、今月の人事異動で警部に昇任し刑事課長に着任した。(東京朝日 2010 年 03 月 29 日)

同じく、「着工する」の外部構成も(27)、(28)のように N'P に二格を取って自動詞用法として用いられる。N'P には(27)の「改修工事」のように N の下位語が来る場合と、(28)の「建設」のように N「工(事)」の所有物が来る場合の二通りがある。

(27) 市議会で財産取得の議案が可決されれば、十月に改修工事に着工する。  
(中日朝刊 2012 年 06 月 12 日)

(28) 事業者2社が設立した特定目的会社が9月にも建設に着工し、来年7月の発電開始を目指す。(朝日朝刊 2012 年 08 月 24 日)

しかし、「着任する」と異なり、「着工する」は(29)や(30)のように他動詞用法としても用いられる。

(29) 西武鉄道は所沢駅を橋上化し、販売施設も充実させる大規模改良工事を三月末に着工し、同社創立百周年の二〇一二年度の完成を目指す、と発表した。(東京朝刊 2010 年 01 月 22 日)

(30) 津市は 11 年度から調査設計を行い、12 年度に水路復旧工事を着工し、15 年度までに完成させる見込み。(朝日朝刊 2010 年 12 月 10 日)

これは、「着工する」はある工事に着くという「帰着」を表す意味のほかに、その工事を始めるという「開始」の意味としても機能するからだと考えられる。そのため、「着任する」は「帰着」の意味のみを表すため、(31b)のように二格をヲ格に置き換えることもできなければ、「～を始める」に置き換えることもできない。これに対し、「着工する」は「帰着」の意味のほかに「開始」の意味も表すため、(32b)のように二格をヲ格に置き換えることもでき、(32c)のように「～を始める」に置き換えることもできる。

- (31) a. 教員の大半が新しい学校に着任した。  
b. \*教員の大半が新しい学校を着任した。  
c. \*教員の大半が新しい学校を始めた。

- (32) a. 西部鉄道は三月末に大規模改良工事に着工する。  
b. 西部鉄道は三月末に大規模改良工事を着工する。  
c. 西部鉄道は三月末に大規模改良工事を始めた。

### 3.3 Ⅲ類:[Nを着ける]

このタイプは、(i)内部構成において[N<移動物>を着ける]をいう他動詞の意味関係で結合しており、(ii)外部構成においては他動詞用法として用いられるもの(「着色類」と自動詞用法として用いられるもの(「着手類」)に分けられる。

#### 5) 「着色類」

「着色類」に属するのは「着色する」しか見当たらない。

(i)内部構成において、「着色する」は[色を着ける]という他動詞の意味関係で結合されており、「色」は<移動物>を表す。

(ii)外部構成において、「着色する」は(33a、b)のようにヲ格の N'P を取って他動詞用法として用いられる。その時、N'P には(33a)の「紫色を着色する」のように N の下位語が来る場合と、(33b)は「卵の殻を着色する」のように N の付着先(所属先)が来る場合の二通りがある。

- (33) a. 赤米ともち米でおこわを、もち米とサツマイモでねりくりを作り、丸もちに  
は紫イモの煮汁で鮮やかな紫色を着色。子どもたちは「おいしい」とほ  
おばった。(朝日朝刊 2001 年 12 月 17 日)  
b. 車道歩道の間にある幅約 1.2 メートルの路側帯を緑色に着色し、自転  
車の通行を促す表示もする。(朝日朝刊 2007 年 08 月 08 日)

つまり、「着色する」は同じ事態を表すのに(34a、b)や(35a、b)のように二通りの他動詞構文が用いられることが分かる。ここで、a 文はヲ格の N'P に N の下位語(「紫色」、「緑色」)を取る場合、b 文はヲ格の N'P に N の所属先(「丸もち」、「路側帯」)を取る場合である。前者は色の種類に焦点が置かれているのに対し、後者は色を着ける場所に焦点が置かれているという違いがある。

- (34) a. 丸もちに 紫色を 着色する。  
          <帰着点> <移動物> <移動物>  
                  (下位語) (上位語)

- b. 丸もちを 紫色に 着色する。  
〈帰着点〉 〈移動物〉 〈移動物〉  
(所属先) (所属物)
- (35) a. 路側帯に 緑色を 着色する。  
〈帰着点〉 〈移動物〉 〈移動物〉  
(下位語) (上位語)
- b. 路側帯を 緑色に 着色する。  
〈帰着点〉 〈移動物〉 〈移動物〉  
(所属先) (所属物)

## 6) 「着手類」

「着手類」には「着手する」、「着目する」、「着眼する」などの動詞が挙げられる。

(i) 内部構成を見ると、「着手類」は[N を着ける]という他動詞の意味関係になっており、N は移動物を表す。例えば、「着手する」は[手を着ける]ことを表し、「着目する」は[目線を着ける]ことを表し、「着眼する」は[視線を着ける]ことを表す。

(ii) 外部構成を見ると、「着手類」は(36)～(38)のようにヲ格の N'P を取らない自動詞用法である。

- (36) a. 来年一月には民放などのアンテナ撤去、塔全体の塗装工事に着手する。(中日夕刊 2011 年 12 月 07 日)
- b. \*塔全体の塗装工事に両手を着手する。
- (37) a. 企業は新卒者採用に当たり、学生のコミュニケーション能力や行動力に着目し、学校の成績や語学力などはそれほど重視していないことがアンケート結果に示された。(東京朝刊 2010 年 03 月 23 日)
- b. \*学生のコミュニケーション能力や行動力に両目を着目する。
- (38) a. 同社はトイレの洗浄用水に着眼し、昨年初めから少ない水量で洗浄力を高めるバルブの開発に取り組んだ。(中日朝刊 1996 年 07 月 08 日)
- b. \*トイレの洗浄用水に両眼を着眼する。

前で述べたように、「着手類」は本動詞「着ける」の意味④「手や足、視線などがある場所に届かせる」に対応する。このうち、「着手する」は抽象的な移動を表し、ある仕事にとりかかるという意味で用いられることが多く、「着目する」と「着眼する」はある事に注意を払うという意味として用いられる。

### 3.4 IV類: [Nを着る]

このタイプは、(i)内部構成において[N<移動物>を着る]という他動詞の意味関係で結合されており、(ii)外部構成においても他動詞用法として用いられる。このタイプに属するのは「着帽類」の一種類のみである。

#### 7) 「着帽類」

このタイプには「着帽する」と「着衣する」などが挙げられる。

まず、(i)内部構成について見ると、「着帽類」は[Nを着る]という他動詞の意味関係になっており、Nは身につける<移動物>を表すことが分かる。すなわち、「着帽する」は[帽子を着る](現代では「かぶる」)ことを表し、「着衣する」は[衣類を着る](身に着ける)ことを表す。

次に、(ii)外部構成について見る。「着帽類」は(39)や(40)のようにヲ格のN'Pを取らない自動詞用法として用いられる。

(39) パイプオルガンの生演奏が響く中、着帽した学生たちはキャンドルのともし  
びを掲げながら決意を新たにしていた。(朝日朝刊 2007 年 05 月 13 日)

(40) 伊井君は、しじら織りの布地で着衣しやすい工夫を凝らした阿波踊り用の  
「ももひき」をつくり、「とっておきのアイデアハーフパンツ部門」で全国2位  
を受賞した。(朝日朝刊 2006 年 03 月 05 日)

外部構成においてN'Pを取らない点では、「脱帽する」と共通している。ただし、「脱帽する」は「帽子を脱ぐ」の意味のほかに、「相手に敬服、または降参する」という間接的な意味を持つのに対し、「着帽類」は「帽子を着用する」という直接的な意味しか持たない点で異なる。

### 3.5 I類+Ⅲ類

このタイプは、(i)内部構成において[N<移動物>が着く]という自動詞の意味関係で結合される場合と「N<移動物>を着ける」という他動詞の意味関係で結合される場合との二通りがあり、(ii)外部構成においても自動詞用法と他動詞用法の両方を持つ点で特徴がある。「着 N する」のうち、このタイプには次の 8)「着火類」がある。

## 8)「着火類」

この類には「着火する」の 1 語しか見当たらない。

まず、(i) 内部構成について見ると、「着火する」は(41)のように[火がつく]という自動詞の意味関係と[火をつける]という他動詞の意味関係の二通りがあり、N はいずれも〈対象物〉を表す。

(41) 「着火する」の内部構成:

I 類:[火がつく](自)・・・「火」は〈移動物〉

III 類:[火をつける](自)・・・「火」は〈移動物〉

次に、(ii) 外部構成について見る。内部構成と同じく「着火する」は外部構成においても(42a、b)のような自動詞用法と(43a、b)のような他動詞用法を持つ。この時、N'P には(42a)の「火花」や(43a)の「神火」のように N(火)の下位語が来る場合と、(42b)の「ストーブ」や(43b)の「ガスバーナー」のように N(火)の所属先(物や点火装置)が来る場合の二通りがある。

(42) a. 溶接器具も使っており、上田署は火花が着火した可能性もあるとみて調べている。(中日朝刊 2012 年 08 月 05 日)

b. この(水分が混入している)灯油を使うとストーブが着火しない可能性があるという。(中日朝刊 2010 年 12 月 04 日)

(43) a. 「火防守護」で知られる熱田区神宮二丁目の秋葉山円通寺で十六日夜、火渡り神事が繰り広げられた。(中略)。祈とうに続いて午後八時、一辺五メートルの正方形に敷き詰めた松葉と薪に神火を着火。(中日朝刊 1993 年 12 月 17 日)

b. 19 歳と 28 歳の作業員男性 2 人が、貨物用エレベーターの修理でガスバーナーを着火した際に、もれていたガスに引火。顔や手などにやけどを負ったという。(朝日朝刊 2010 年 06 月 29 日)

このように、「着火する」は自動詞用法と他動詞用法を持っているが、自他対応を成す場合とそうでない場合があり、注意が必要である。つまり、(44a)や(44b)のように N'P が N の所属先の場合は、自動詞用法の主語が他動詞用法の目的語に対応し、両者は自他対応を成す。意味的にも、動作主がストーブに対して「火をつける」という行為を行い、その結果ストーブに火をついたことを表す。

(44) a. ストーブが着火した。(自)



b. 太郎がストーブを着火した。(他)

これに対し、(45a)や(45b)のようにN'PがNの下位語の場合は、自動詞用法の主語が他動詞用法の目的語と対応していない。(45a)は、稲妻や電線のショートなどのような自然現象によって火が発生することを表し、誰かによって点火されることを表すのではない。一方、(45b)動作主が前もって採火した火を松葉と薪に付けて燃えるようにする(点火する)ことを表す。したがって、(45b)の目的語を主語にするには(46c)のように受身文にする必要がある。

(45) a. 松葉と薪に神火が着火する。(自)

b. 住職が松葉と薪に神火を着火する。(他)

c. 神火が住職によって松葉と薪に着火された。(受身文)

「着火する」は、また(46a)の「ろうそくの火をコピー用紙に着火させる」や(46b)の「ライターを着火させる」のように「着火＋させる」という使役形で他動詞の意味を表すことができる。この場合、(46a)のように「(Nの下位語)を＋着火させる」の構造を取ることもできれば、(46b)のように「(Nの所属先)を＋着火させる」の構造を取ることもできる。

(46) a. 判決によると、降格人事などの腹いせに、三月七日午後十一時五十分ごろ、大津市におの浜の滋賀リビング新聞社事務所で、ろうそくの火をコピー用紙に着火させ、床や壁など約二十八平方メートルを焼損させた。(中日朝刊 2010 年 06 月 08 日)

b. もみ合いになって過ってライターを着火させ、男性の衣服や室内に燃え移らせた。男性はやけどを負い、2日後に多臓器不全で死亡した。  
(朝日朝刊 2010 年 11 月 25 日)

このことから、「着火する」は他動詞用法を持ちながら、(26a、b)のように使役形を用いて他動詞と同じ意味を表すこともできることが分かる。

#### 4. まとめ

本研究では、「着 N する」の意味的・構文的特徴について、(i)内部構成、(ii)外部構成、(iii)N'PとNの意味関係の3つの側面から分析した。その結果をまとめると表3のようになる。

表 3 「着 N する」の諸特徴

		N'P 無		N'P を取る					
		着手類	着帽類	着雪類	着弾類	着陸類	着任類	着色類	着火類
(i) N の特徴	〈移動物〉	○	○	○	○	×	×	○	○
	〈帰着点〉	×	×	×	×	○	○	×	×
(ii) N'P の特徴	〈移動物〉	×	×	○	○	×	×	○	○
	〈帰着点〉	×	×	○	×	○	○	○	○
(iii) N'P と N の関係	下位語-上位語	×	×	○	○	○	○	○	○
	所属先-所属物	×	×	○	×	×	×	○	○

表 3 に示したように、「着 N する」は内部構成においては I 類～IV 類の 4 つに分類でき、外部構成によつての 8 つに分類できる。それぞれの意味的・構文的特徴をまとめると以下ようになる。

I 類: [N〈移動物〉に着く] (自)

1) 「着雪類」:

(「着雪する」、「着氷する」など)

《意味》: 雪や氷 (N) がある場所に付着する。

《構文 a》: [場所] に [雪・氷 (N の下位語)] が着 N する (自)

《構文 b》: [場所 (N の帰着点)] が着 N する (自)

2) 「着弾類」:

(「着弾する」、「着信する」、「着金する」など)

《意味》: 電信や送金、弾 (N) などがある場所に着く。

《構文》: [電信・送金・弾など (N の下位語)] が [場所] に着 N する (自)

II 類: [N〈帰着点〉に着く] (自)

3) 「着陸類」:

(「着席する」、「着座する」、「着陸する」、「着岸する」、「着水する」など)

《意味》: 人や乗り物がある場所 (N) に着く。

《構文》: [人・乗り物] が [場所 (N の下位語)] に着 N する (自)

4)「着任類」:

(「着任する」、「着工する」など)

《意味 1》:新しい任務や工事(N)に着く。

《構文 1》:[人]が[任務・工事(Nの下位語)]に着 N する

《意味 2》:新しい工事を始める。

《構文 2》:[人]が[工事(Nの下位語)]を着工する(他)

Ⅲ類:[N<移動物>を着ける](他)

5)「着色類」:

(「着色する」)

《意味》:ある物や場所に色(N)を着ける。

《構文 a》:[人・機械]が[場所]に[色(Nの下位語)]を着色する(他)

《構文 b》:[人・機械]が[場所(Nの帰着点)]を着色する(他)

6)「着手類」:

(「着手する」、「着目する」、「着眼する」など)

《意味》:ある事にとりかかる、または注意を払う。

《構文》:[人]が[事]に着 N する(自)

Ⅳ類:[N<移動物>を着る](他)

7)「着帽類」:

(「着帽する」、「着衣する」)

《意味》:帽子や衣類(N)などを身に着ける。

《構文》:[人]が着 N する(自)

I 類+Ⅲ類

8)「着火類」:

(「着火する」)

《意味 1》:物や点火装置に火(N)がつく。

《構文 1-a》:[物・点火装置]に[火(Nの下位語)]が着火する(自)

《構文 1-b》:[物・点火装置(Nの所属先)]が着火する(自)

《意味 2》:物や点火装置に火(N)をつける。

《構文 2-a》:[人]が[物・点火装置]に[火(Nの下位語)]を着火する(他)

《構文 2-b》:[人]が[物・点火装置(Nの所属先)]を着火する(他)

本研究の分析から分かるように、V-N 型漢語動詞については、N と N'P の関係だけでなく、N と N'P と V の三者間の関係が統語機能に影響を与えている。このことから V-N 型漢語動詞の統語機能の解明には N と N'P と V の 3 つの要素を合わせて分析することが重要であると言える。「除 N する」、「離 N する」、「着 N する」に限らず「脱 N する」、「入 N する」、「出 N する」など、日本語には動詞的要素と名詞的要素が格関係で結合された V-N 型漢語動詞が多く存在する。これからも引き続きこのような個別的研究を積み重ねることで、V-N 型漢語動詞の統語機能について考察を深めたい。

[参考文献]

- 北原保雄編(2010)『明鏡国語辞典第二版』大修館書店
- 小林英樹(2001)「動詞的要素と名詞的要素で構成される二字漢語動名詞に関する再考」『現代日本語研究』8
- 小林英樹(2004)『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房
- 張 善実(2013a)「漢語サ変動詞「除 N する」の意味と構文」『言葉と文化』14, pp.19-35
- 張 善実(2013b)『日本語の V-N 型漢語動詞の語構成論的研究—離脱・帰着を表す動詞を中心に—』博士学位論文, 名古屋大学
- 張 善実(2013c)「漢語サ変動詞「離 N する」の意味と構文」『ことばの科学』26, pp. 133-152
- 中川秀太(2005)「推論による VN の外部表示の特殊化」『日本語文法』5-1, 89-103
- 松村明監修(2006)『大辞泉増補・新装版(デジタル版)』SHOGAKUKAN
- 山田 忠雄、柴田 武ほか編(2011)『新明解国語辞典第七版』三省堂
- 山梨正明(1993)「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知メカニズム」仁田義雄編『日本語の格をめぐる』くろしお出版

**付記:** 本研究は上海師範大学文科科研経費“表示离脱、归着意义的 V+N 式サ变动词词干的语义句法研究(研究代表者:張善実、経費番号:A-0230-16-001006)”の助成を受けたものである。